史跡 斎宮跡

平成15年度現状変更緊急発掘調査報告

平成17(2005)年３月

明　和　町

序

国史跡斎宮跡は、指定されてから本年で四半世紀の歳月が経過しました。その間、町といたしましては、何よりもこの貴重な文化財がこの地にあることに誇りを持ち、次の世代に瑕疵なく継承していくため国、県、地元地権者の協力を得て、保護・保存に取り組んでまいりました。史跡の整備は、サイトミージアムの実現に向けて「斎宮歴史博物館」や「いつきのみや歴史体験館」、「1／10史跡全体模型」をはじめ、約16haが完了しました。また、史跡の活用として毎年６月には「斎王まつり」、10月には「斎宮浪漫まつり」が盛大に開催されています。さらに本年度は10月に「第36回全国競技かるた女流選手権大会」が、２月には「いつきのみや梅まつり」が開催されました。特に、女流選手権大会は、百人一首競技かるたが誕生して100周年の記念すべき大会であり、いわば女性の都であった「斎宮」でこのような記念大会を開催したことは意義深いものであったと感じます。

このように斎宮跡を多くの人々に幅広く親しんでもらうため活用を図りながら、さらに魅力あるものにしていきたいと考えています。

この報告書は、平成15年度に44件提出された現状変更等許可申請の中で事前発掘調査が必要であった19件の結果についてまとめたものです。

現状変更に伴う調査は、第142-16次調査のように比較的まとまったものや浄化槽のような非常に小さなものなど規模は様々です。また、調査箇所は、広い史跡内を点在しており、これらは計画調査では得られない貴重な資料を与えてくれるものであり、成果の積み重ねが斎宮跡を解き明かすものと思っています。

最後になりましたが、発掘調査にご理解とご協力いただきました地元地権者のみなさま、また、発掘調査から報告書作成に至るまでご協力いただいた斎宮歴史博物館調査研究グループの方々に対してここに厚くお礼申し上げます。

平成17（2005）年３月

三重県多気郡明和町

町長　木戸口　眞　澄

例　　言

1　本書は、平成15（2003）年度に明和町が実施した史跡斎宮跡（三重県多気郡明和町斎宮・竹川地内）の現状変更緊急発掘調査結果をまとめたものである。

2　本書に掲載した調査のうち、第142－２，３次調査の２件は公共事業として事業者（明和町）が費用負担したが、それ以外については国庫および県費の補助金を受けて実施したものである。

3　調査は明和町が主体となり、斎宮歴史博物館および明和町斎宮跡課が現地調査を担当した。

4　調査地区名の表示方法（例；６ＡＬ８）については、『史跡斎宮跡平成13年度発掘調査概報』（斎宮歴史博物館　2003年）による。

5　遺構の平面図は、過年度の調査成果との整合を図るため、測地成果2000施行以前の旧国土座標第Ⅵ系に相当する座標系を用いて表現している。

6　遺構の時期区分については、『斎宮跡発掘調査報告』Ⅰ（斎宮歴史博物館　2001年）を基準とした。

7　遺構冒頭の略記号は見た目の形態から以下のように表記した。
ＳＡ；柱列　　ＳＢ；掘立柱建物　　ＳＤ；溝　　ＳＥ；井戸　　ＳＫ；土坑
ＳＨ；竪穴住居　　ＳＺ；落ち込みほか　　Ｐｉｔ；柱穴

8　遺物の実測図は、実物の４分の１に縮小しての表示を基本とし、詳細図が必要と判断したものは２分の１で表示した。

9　調査資料類は、斎宮歴史博物館で一括保管している。

10　本書の編集は、小濱　学（斎宮歴史博物館調査研究グループ）および中野敦夫（明和町斎宮跡課）が行なった。執筆は、小濱・中野のほか、当該年度の調査担当者であった伊藤裕偉が担当した。なお、文責は文末に示している。

目　　次

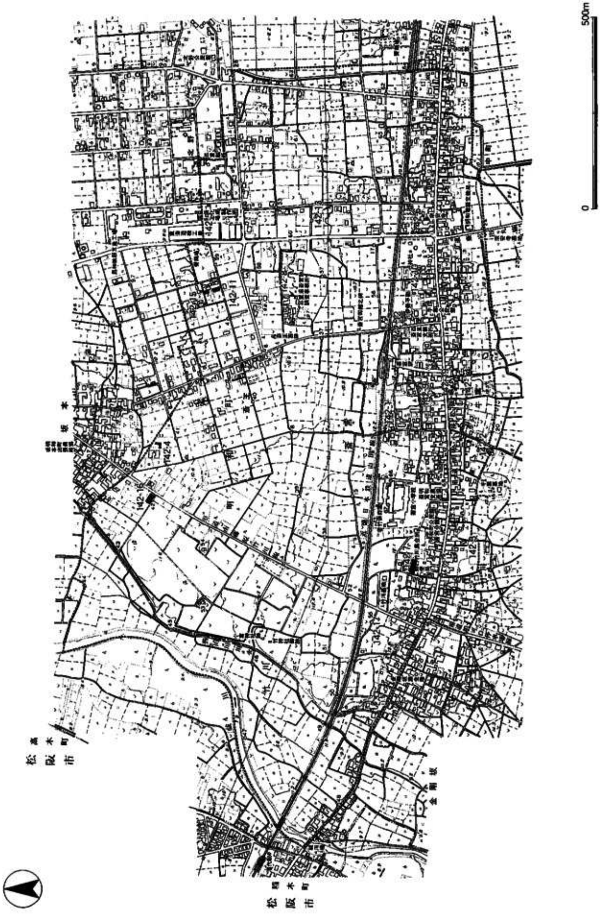
Ⅰ　前　　言 …… 1
Ⅱ　調査報告
　1　第142－１次調査 …… 2
　2　第142－２次調査 …… 2
　3　第142－３次調査 …… 3
　4　第142－４次調査 …… 3
　5　第142－５次調査 …… 4
　6　第142－６次調査 …… 5
　7　第142－７次調査 …… 6
　8　第142－８次調査 …… 6
　9　第142－９次調査 …… 7
　10　第142－10次調査 …… 7
　11　第142－11次調査 …… 7
　12　第142－12次調査 …… 8
　13　第142－13次調査 …… 8
　14　第142－14次調査 …… 8
　15　第142－15次調査 …… 9
　16　第142－16次調査 …… 9
　17　第142－17次調査 …… 14
　18　第142－18次調査 …… 18
　19　第142－19次調査 …… 18
付編　史跡現状変更等許可申請 …… 22

表・挿図目次

［表］1　史跡現状変更等許可申請の推移 …… 1
　2　第142次調査　遺構一覧表 …… 20
　3　第142次調査　掘立柱建物等一覧表 …… 20
　4　第142次調査　出土遺物観察表 …… 21
　5　第142次調査　緑釉陶器出土地点破片数一覧表 …… 21
　6　平成15年度現状変更等許可申請一覧表 …… 23
［図］1　史跡地内発掘調査地位置図
　2　第142－１次調査区位置図（１：4,000） …… 2
　3　第142－２，３次調査区位置図（１：4,000） …… 2
　4　第142－４次調査区位置図（１：4,000） …… 3
　5　第142－５，６次調査区位置図（１：4,000） …… 4
　6　第142－７，８次調査区位置図（１：4,000） …… 5
　7　第142－９，10次調査区位置図（１：4,000） …… 6
　8　第142－11，12次調査区位置図（１：4,000） …… 8
　9　第142－13，14次調査区位置図（１：4,000） …… 9
　10　第142－15次調査区位置図（１：4,000） …… 10
　11　第142－16，17，18，19次調査区位置図（１：4,000） …… 11
　12　第142－１，４，５，６，９次調査区平面図（１：200） …… 12
　13　第142－８，10，11，12，17，18，19次調査区平面図（1:200） …… 13
　14　第142－２，３，16次調査区平面図（１：200） …… 14
　15　第142次調査ＳＢ8828，ＳＡ8830（１：100），ＳＸ8825・8949・8950（１：50）
　　平面・断面図 …… 15
　16　第142次調査土層断面図①（１：100） …… 16
　17　第142次調査土層断面図②（１：100） …… 17
　18　第142次調査出土遺物①（１：4） …… 18
　19　第142次調査出土遺物②（１：4） …… 19

写 真 図 版

1　第142－４次調査　上：調査区全景（南東から）　下：ＳＢ8828・8829，ＳＡ8830（北から）
2　第142－４次調査　上：ＳＫ8823（南から）　下：ＳＸ8825出土状況（南東から）
3　第142－５次調査　上：調査区全景（西から）　下：ＳＸ8950（南から）
4　第142－５，６次調査　上：５次調査ＳＤ8954（南から）　下：６次調査区全景（南東から）
5　第142－８，16次調査　上：８次調査ＳＡ8955・8956（東から）　下：16次調査区全景（西から）
6　第142－16次調査　上：ＳＡ8989（北西から）　下：ＳＥ8973（西から）
7　第142－17次調査　上：17次調査区全景（北西から）　下：第142次調査出土遺物



第1図　史跡地内発掘調査位置図

Ⅰ 前　　言

斎宮跡は平成15年度で史跡指定されてから25年を経過する。この間、年間50件程度の調査目的以外での史跡現状変更等許可申請が出されている。平成15年度は44件で、ほぼ例年並の件数であった。その内訳は私有道路の造成、側溝改修、上水道の改修、個人住居の新築・増改築、電柱の設置などがある。

将来発生が予想されている東海・東南海地震へ備えるために、耐震あるいは免震構造の住宅建設が増加の傾向にある。私有財産を守るためには、前述のような設備は当然必要であろうし、行政側もそのような行為を認めていかざるをえない。また、当該年度は、史跡内で行われなかったが、公共下水道といった社会資本の整備が将来おこりうる状況である。これらのような事業が史跡地内で実施された場合、下部遺構の保護という文化財保護行政側の課題とは、相容れないものとなってしまう。史跡という側面と、住民の生活空間という二つの側面を、どのように両立させていくのかが今後の最重要課題である。

個人住宅の浄化槽設置については、当該年度も多くの申請があり、掘削が遺構面まで達する場合が多い。しかし、計画調査が行われることがない住宅密集地における調査であるので、小規模ではあってもその調査記録は重要である。その記録の蓄積が斎宮跡解明の一助となるだろう。なお、下水道網の整備とともに当該の申請は減少することが想定できよう。

なお、平成13年度からは斎宮跡の発掘調査に際しては、地区名の呼称を旧国土座標第Ⅵ系に沿った一辺100mの正方形で大地区を、その大地区を25等分し一辺４mの正方形でグリッドを設定している。このように、測地成果2000施行以前の座標系を用い、30年来の成果と照合できるようにした。なお、測地成果2000との関係については、別途対照図を設けることで対応する予定である。

（小濱　学）

年　度	現状変更申請数	発掘調査件数	調査面積（㎡）	うち補助金調査件数	同調査面積（㎡）
昭和54	33	17	3,968	12	996
55	60	12	1,281	10	815
56	53	12	5,416	10	696
57	50	8	657	7	577
58	52	16	3,757	10	1,440
59	30	15	2,884	12	1,589
60	39	8	1,260	5	1,014
61	54	12	1,845	9	1,507
62	57	16	2,854	13	1,620
63	46	17	8,820	7	1,131
平成元	57	16	7,091	9	1,061
2	58	8	1,397	5	914
3	46	3	1,550	1	1,190
4	41	6	895	5	825
5	48	8	1,670	6	1,090
6	35	6	1,360	4	1,032
7	39	2	587	1	480
8	47	6	709	4	613
9	39	6	832	2	452
10	28	4	882	2	396
11	37	8	816	3	186
12	42	10	512	8	469
13	38	14	439	5	409
14	39	22	760	4	304
15	44	19	1,558	8	1,124
計	1,112	271	53,800	162	21,930

第１表　史跡現状変更等許可申請の推移

Ⅱ 調 査 報 告

1　第142-1次調査（6AM11）

調査場所　多気郡明和町斎宮字広頭3381-7,-8

原　　因　住宅改築

調査期間　平成15年5月7日

調査面積　3.5㎡

概況）　史跡地内中央南部にあたる。住宅改築（第138-18次調査）に伴う浄化槽の埋設である。現況は住宅地で、標高は約12.0m、遺構面は赤褐色土で、標高約11.2m前後で確認できる。

遺構と遺物）　調査区は、浄化槽部分ということもあり、狭小である。遺構の全体を検出することができなかったが、土坑3基（SK8814・8815・8816）を確認した。土坑SK8816の埋土からは斎宮Ⅲ期と考えられる土師器小皿が3枚重なって出土し、土師器皿も確認することができた（第18図1～5）。墓的な性格を持つものなのだろうか。土坑SK8814の埋土からは鎌倉時代のものと思われる陶器練鉢（第18図6）が出土した。

（小濱　学）

2　第142-2次調査（6AM13）

調査場所　多気郡明和町斎宮字牛葉・木葉山地内

原　　因　水道管布設

調査期間　平成15年6月19日～21日

調査面積　33㎡

概況）　史跡地内中央南部にあたる。方格地割木葉山西区画の西外縁部に相当する。水道管改修工事に伴うため、幅約60cmの狭隘な調査区である。現況は道路で、道路面の標高は約13.1m、遺構面は明黄褐色粘土で、標高約12.8m前後で確認できる。

遺構と遺物）　掘立柱建物を構成すると考えられる柱穴を3基確認した。とくに西端部で検出した1基は略方形を呈している。出土遺物は無かったが、これまでの調査事例を参考とすれば、平安時代中期頃の掘立柱建物に伴う柱穴と考えられる。

第2図　第142-1次調査区位置図（1：4,000）

第3図　第142-2，3次調査区位置図（1：4,000）

小結） この調査区は、狭隘とはいえ、これまでほとんど調査が実施されていない部分であった。確認した数少ない遺構から推測すると、平安時代中期頃の建物がこの付近にまで及んでいるものと考えられる。また、当地は現道下約30cmで遺構面にあたり、現地表面から遺構面までの深度は極めて浅いといえる。遺跡保護のため、今後の開発には注意を要する。 （伊藤裕偉）

3　第142-３次調査（６ＡＫ13）

調査場所　多気郡明和町竹川字南裏地内
原　　因　水道管布設
調査期間　平成15年７月22日～25日
調査面積　30㎡
概況）　史跡地内中央南部にあたる。前掲の第142-２次調査と一連の水道管改修工事に伴う調査で、同じく幅約60cmの狭隘な調査区である。現況は道路で、北端部は旧参宮街道にあたる。道路面の標高は約13.1mである。遺構面は明黄色～黄白色粘土で、標高約12.6m前後で確認できる。
遺構と遺物）　掘立柱建物を構成すると考えられる柱穴のほか、近世の溝・土坑を確認した。柱穴からの出土遺物は無く、明確な時期は不明であるが。概ね平安時代中期頃かと思われる。調査区を斜めに走る溝ＳＤ8179は近世のものである。また、調査区の南部では、近世の土器類を含む土坑を確認した。
小結）　この調査では、ここから東方約200mの地点で、平成14年度に実施した第138-10次調査で確認している溝ＳＤ8817の延長上にあたっていたため、その溝がここまで及んでいるのかどうかに注目した。しかし、調査区内に該当する遺構は無く、ＳＤ8179は第142-３次調査区に至るまでに屈曲するか途切れるものと考えられる。

また、ここでの遺構検出面は、現地表下約50～60cmで、先述の第142-２次調査区に比べると深い。史跡斎宮跡地内は、大きく見れば南西部が高く、北東部にかけて低くなっている状況であるが、史跡内部を細かく見ると、１ｍ未満の微細な起伏が各所で見られることわかる。こういった微細な起伏でも、方格地割など斎宮関連施設の設定に影響を与えている可能性があり、注意深くデータを集める必要があろう。

（伊藤裕偉）

4　第142-４次調査（６ＡＭ13）

調査場所　多気郡明和町斎宮字出在家3237-5
原　　因　建物建築
調査期間　平成15年７月31日～８月２日
調査面積　136㎡
概況）　斎宮歴史博物館から北東に約200m、史跡範囲の北限に位置する。現況は畑地で、標高は約10.8m、遺構面は暗灰黄色土で、標高約10.3m前後で確認できる。
遺構と遺物）　主な遺構としては、奈良期の土坑１基、平安時代前半期の掘立柱建物２棟、柱列１基、土坑２基、平安時代後半期の土坑１基、土壙墓１基を確認することができた。
土坑　ＳＫ8821･8822･8823は円形あるいは楕円形を呈している。切り合い関係と出土遺物の時期から、ＳＫ8821はＳＫ8822より新しく、ＳＫ8823はＳＢ8828より古くなる。これらは、遺構検出面から急に落ち込むような状況であった。性格については判然としない。ＳＫ8823の埋土からは斎宮Ｉ期のものと思われる土

第４図　第142-４次調査区位置図（１：4,000）

師器小片を確認した。ＳＫ8822の埋土からは斎宮Ⅰ－４～Ⅱ－１段階、ＳＫ8821の埋土からは斎宮Ⅱ－２段階のものと思われる土師器杯・皿・鍋、須恵器杯（第19図７～12）が出土した。なお、ＳＫ8827は、調査区外の西側に延びていくもので、埋土からは11世紀代のものと考えらえる灰釉陶器椀（第19図13）が出土した。

掘立柱建物　ＳＢ8828は、調査区内で、南北２間、東西２間、東・北・南面に庇が2.4m出ることを確認した。ＳＢ8928は、土坑ＳＫ8823を切っていることや柱穴から出土遺物の時期から、斎宮Ⅱ－１～Ⅱ段階のものと考えられる。また、柵あるいは塀と考えられる柱列ＳＡ8830は、ＳＢ8828と柱穴の並びの方向が同一であることから、同時期のものと思われる。

土壙墓　ＳＸ8825は、長軸約1.9m、短軸約1.1mの楕円形を呈し、長軸の方向はＥ０°Ｗである。遺構のほぼ中央北寄りの部分に、灰釉陶器椀・皿（第19図14・15）が合口の状態で出土した。その地点から、南東約80cmでは灰釉陶器壺（第19図16）が斜位の状態で出土した。これらは底面よりレベルが上であった。出土遺物は11世紀代のものと考えらえる。

なお、いわゆる包含層からは、人面の墨書が施されたと考えられる斎宮編年Ⅱ－１段階の土師器皿（第19図17）、須恵器壺蓋、須恵器杯蓋、土師器甕などが出土した（第19図18～20）。

小結）　史跡範囲の北限で、このような庇が付く掘立柱建物が検出された例はなく、方格地割外の北側地域が斎宮寮に仕えた官人等の居住域であった可能性が指摘できよう。また、史跡の北限を考えるうえで、貴重な成果をえることができた。

（小濵　学）

5　第142-5次調査（６ＡＲ７・Ｓ７）

調査場所　多気郡明和町斎宮字西前沖2604-49

原　　因　道路造成

調査期間　平成15年８月18日～22日、同年10月１日～２日

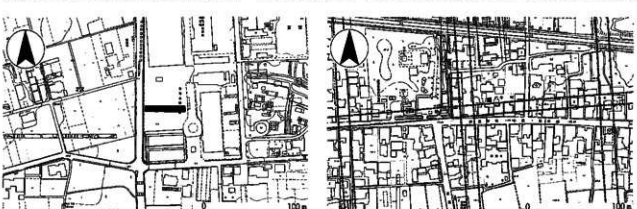
調査面積　236㎡

概況）　史跡地内北東部にあたり、個人住宅の新築に伴い調査した。平成14年度に実施した第138-15次調査は、同一事業者によるものである。調査地は、昭和17年から20年の間には旧陸軍第七通信連隊第一二八部隊の敷地内であり、戦後の昭和24年には斉明中学校が建設された場所である。明和中学校への統合後は払い下げられ、工場として用いられていた。地表面の標高は約10.5mである。遺構面は明黄～明赤褐色粘土で、標高約9.6m前後で確認できる。

遺構）　軍用施設他による撹乱が激しく、遺構面が遺存していた場所は僅かである。遺構には、奈良・平安時代のものと、鎌倉時代以降のものに大別できる。

溝ＳＤ8954は、調査区のほぼ中央部を南北に走る遺構である。法面が垂直に近く、溝底には段が見られる。あるいは、布掘状ピットになるのかも知れない。所属時期は、奈良～平安の範疇と考えられるが、出土遺物が少なく、明確にはできない。

鎌倉時代の遺構には、土壙墓ＳＸ8949・ＳＸ8950がある。ＳＸ8949は長軸約1.5m、短軸約0.8mの楕円



第５図　第142-５，６次調査区位置図（１：4,000　※左 142-５，右 142-６）

形を呈し、長軸は東西方向である。埋土には礫群が認められる。土坑東部がやや深くなっており、その底面には、陶器椀（山茶椀）が１個体、伏せて置かれていた。２基の土壙墓は、13世紀中葉頃の遺構と考えられる。ＳＸ8950は長軸約1.3m、短軸約0.4mの長楕円形で、長軸はやや傾く南北方向である。遺構の北部東寄りには土師器小皿２個体と土師器皿１個体が見られた。なお、遺構は上部が攪乱されており、副葬された土器類はもう少し多かった可能性が高い。

調査区東部には小規模なピットが集中して見られるが、建物としてはまとまらない。

遺物　出土遺物には、斎宮Ⅱ期の灰釉陶器・土師器があるが、少ない。第19図22～24には、土壙墓から出土した土器を図示した。24は尾張産の陶器椀（山茶椀）で、藤澤良祐氏による編年の第６型式に相当する。[22] 22・23は南伊勢系の土師器皿類で、中世Ⅱｂ期に相当する。いずれも、13世紀中葉頃のものである。[23]

なお、当調査区からは焼夷弾が出土している（写真図版７）。攪乱坑内から、潰れた状態で出土した。付近からは、軍用食器と考えられる陶器皿片も出土している。

小結　平成14年度に実施した第138-15次調査では、掘立柱建物の一部が確認されているが、今回は中世墓２基を確認した。攪乱が激しいため、全体の基数は分からないが、２基は比較的近接した位置関係にあることから、中世前期にこの付近は集団墓地として利用されていたものと考えられる。史跡地内では、西部の古里地区付近で同じ頃の墓域が確認されておる。中世前期における史跡地内には、別地点に墓地を形成する少なくとも２集団以上の集落が存在していたものと推察できる。

また、今回出土した焼夷弾は、史跡地内ではじめて出土した戦争遺物である。史跡の性格とは当然無関係ながら、斎宮の歴史を語る重要な資料といえよう。　（伊藤裕偉）

６　第142-６次調査（６ＡＳ12）

調査場所　多気郡明和町斎宮字中西2754

原　　因　建物建築

調査期間　平成15年11月4日～7日

調査面積　33㎡

概況　史跡地内中央南部、方格地割鍛冶山西区画の西外縁部に位置する。個人住宅の基礎部分に伴う、幅約60cmの狭隘な調査区である。現況は宅地で、標高は約11.0m、遺構面は明黄褐色粘土で、標高約10.4m前後で確認できる。

遺構と遺物　中世から近世にかけての土坑や溝を確認した。遺物については、中世以降の土師器類（第19図24～27）、陶磁器類の出土を確認した。

小結　近年、個人住宅の地震対策のために、住宅の基礎部分に鋼管を安定地盤まで回転圧入する工法を取る場合である。今後、この工法については、増加の傾向にあり、調査方法や史跡保護について模索していかなければならないだろう。　（小濱　学）

第６図　第142-７，８次調査区位置図（１：4,000　※左 142-７，右 142-８）

7　第142-7次調査（6ＡＪ12）

調査場所　多気郡明和町竹川字東裏277ほか２筆

原　　因　公民館改築等

調査期間　平成15年９月26日～10月18日

調査面積　330㎡

概況）　史跡地内南西部にあたる。平成15年度に調査した、第138-５次調査と関連する工事に伴うものである。旧公民館の建て替えで、基礎部分は盛り土によって遺構面までは及ばないように対応したが、鳥居・電柱・浄化槽の設置箇所については遺構面を開削することになった。現地表面の標高は約13.6m、遺構面は黄褐色土で、標高約13.1m前後で確認できる。

遺構と遺物）　遺構面以下を開削する箇所については、遺構・遺物ともに確認できなかった。ただし、電柱の設置箇所はドリルで開削するものであったため、確認できなかった可能性もある。なお、電柱設置にかかる開削は、直径約30～40cmの円形であった。

遺物は、遺構に伴うものではないが、16世紀前半代にあたる肥前陶磁がある（第19図28）。28は皿で、高台畳付のみが無釉である。内面には白色の圏線と、梅花文と考えられる釉薬施文が見られる。大橋康二氏による編年のⅡ～Ⅲ期に相当し、西暦1610～1640年頃のものである。[10]

小結）　初期肥前産陶磁の出土は、三重県内では極めて珍しく、今のところ明確な報告例は無い。近世初期の斎宮は、参宮街道沿いの宿場町であり、この地域の中心的な場でもあった。今回出土した土器は、その一端を示すものと考えられる。　（伊藤裕偉）

8　第142-8次調査（6ＡＱ9）

調査場所　多気郡明和町斎宮字下園2926-8

原　　因　建物増築

調査期間　平成15年12月17日～18日

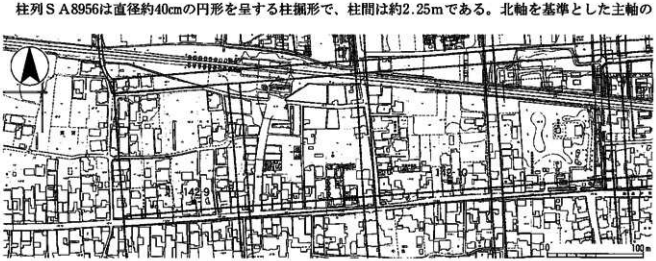
調査面積　13㎡

概況）　史跡地内中央北部にあたり、個人住宅の増築に伴い調査した。方格地割下園区画地内にあたる。現地表面の標高は約10.5mである。遺構面は明黄褐色粘土で、標高約10.2m前後で確認できる。

遺構と遺物）　掘立柱建物を構成すると考えられる柱列２条を検出した。いずれも３基の柱穴が確認されたのみで、建物がどちらに展開するのかは分からない。

柱列ＳＡ8955は１辺約50～60cmの隅丸方形を呈する柱掘形で、柱間は約1.9mである。北軸を基準とした主軸の方位はN0.5°Wである。中央の柱抜き取り痕から、完形の須恵器杯Ａが出土した（第19図21）。斎宮Ⅱ－２期に相当すると考えられる。

柱列ＳＡ8956は直径約40cmの円形を呈する柱掘形で、柱間は約2.25mである。北軸を基準とした主軸の



第７図　第142-9，10次調査区位置図（１：4,000）

方位はＮ６°Ｗである。柱掘形内の出土遺物には、斎宮Ⅱ－１期頃のものがあるが、小片であるため、それが建物の所属時期を決定するとは断言できない。ひとまず、斎宮Ⅱ期の範疇で考えるべき建物という指摘に止めておく。

小結） 今回の調査区は、狭隘ではあったものの、掘立柱建物の一部を構成すると考えられる柱列を２条確認した。方格地割下園区画地内は、近世以降の粘土採掘坑による撹乱が激しい場所であり、これまで建物の確認はほとんど無く、明確に確認されたのは今回がはじめてである。今回の調査によって、下園区画においても、方格地割に沿った建物群が展開していたものと推測できる。（伊藤裕偉）

９　第142-９次調査（６ＡＮ13）

調査場所　多気郡明和町斎宮字牛葉3032-1

原　　因　浄化槽設置等

調査期間　平成16年１月６日

調査面積　5.2㎡

概況）　近鉄斎宮駅から西へ約50m程の旧参宮街道沿いに位置する第四種保存地区においての調査である。方格地割内山西区画の南西外縁部にあたる。現況は宅地で標高は約12.1m、遺構面は明黄褐色土で、標高約11.5m前後で確認できる。

遺構と遺物）　掘立柱建物（ＳＡ8957）を構成すると考えられる柱穴を２基確認した。調査区外に延びていくことが想定できる。柱穴の底部付近には20～30cm程度の丸い石が詰められていた。出土遺物は無く、所属時期については判断に苦しむ。平安期の土師器類や緑釉陶器が遺構検出面の検出までに出土していることから、平安期のものであろう。（小濵　学）

10　第142-10次調査（６ＡＱ12）

調査場所　多気郡明和町斎宮字牛葉3007

原　　因　建物改築

調査期間　平成16年１月14日～15日

調査面積　5.8㎡

概況）　調査地は、史跡地内中央南部、方格地割牛葉西区画の西外縁部にあたる。竹神社から西へ約100mに位置する。現況は宅地で標高は約11.9m、遺構面は赤褐色粘質土で、標高約10.8m前後で確認できる。既設浄化槽があったため、遺構面は確認できるものの撹乱されていて削平を受けているものと思われる。

遺構と遺物）　中世後期と考えられる土坑（ＳＫ8958・8959）を２基確認した。２基の土坑の深さは浅く、前述のように削平を受けているのだろう。遺物としては、中世後期の南伊勢系の土師器鍋などが出土した。（小濵　学）

11　第142-11次調査（６ＡＱ７）

調査場所　多気郡明和町斎宮字楽殿2392-2,-3

原　　因　建物改築

調査期間　平成15年２月９日～12日

調査面積　154㎡

概況）　調査地は、斎王の森から東に約150m、明和町斎宮字楽殿に所在し、個人住宅建設に伴う調査である。現況は畑地で標高は約11.2m、遺構面は赤褐色土で、標高約10.6m前後で確認できる。

遺構と遺物）　平安時代以降の溝７条を確認することができた。溝については、Ｎ５°Ｅ前後で、ほぼ方向が揃っている。区画溝的な性格をもつものなのだろうか。平安時代後半から中世までの、土師器類（第19図29～41）や須恵器類、陶器(第19図42)を確認した。（小濵　学）

12　第142-12次調査（６ＡＰ11・12）

調査場所　多気郡明和町斎宮字内山3020-11

原　　因　建物建築

調査期間　平成15年12月26日

調査面積　８㎡

概況）　調査地は、近鉄斎宮駅から町道沿いに東へ30m、方格地割内山東区画内に位置する。個人住宅建設に伴う調査である。現況は住宅地で標高は約11.9m、遺構面は赤褐色粘質土で、標高約11.2m前後で確認できる。

遺構と遺物）　浄化槽設置部分で平安時代のものと考えられる柱穴を１ヶ所確認した。基礎部分は、遺構面は確認できるものの、以前にあった住宅により、ほとんどが攪乱されていて、削平を受けているものと思われる。平安時代の土師器類、緑釉陶器が少量出土した。　（小濱　学）

13　第142-13次調査（６ＡＳ10）

調査場所　多気郡明和町斎宮字西加座2681-5

原　　因　浄化槽設置

調査期間　平成15年７月24日

調査面積　３㎡

概況）　調査地は、竹神社の北東150m程に位置する。方格地割西加座南区画西の北側にあたる。住宅地内において、汲み取り式便槽から合併浄化槽への取替えに伴う調査である。現況は宅地で、道路面の標高は約10.1m、遺構面は黄褐色粘土で、標高約8.7m前後で確認できる。

遺構と遺物）　第37-12次・58-２次調査に囲まれた部分である。調査区内全般で、攪乱をうけているようである。遺構及び遺物を確認することができなかった。　（小濱　学）

14　第142-14次調査（６ＡＯ13）

調査場所　多気郡明和町斎宮字牛葉118

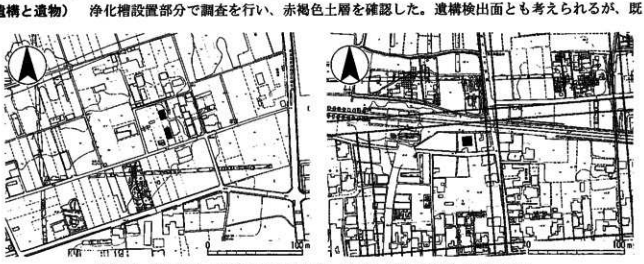
原　　因　浄化槽設置

調査期間　平成15年11月５日

調査面積　３㎡

概況）　調査地は、斎宮駅から南へ100m程の旧参宮街道沿いに位置する。方格地割木葉山西区画の北側にあたる。住宅地内において、浄化槽の取替えに伴う調査である。現況は住宅地で、道路面の標高は約12.1m、遺構面は赤褐色土で、標高約11.1m前後で確認できる。

遺構と遺物）　浄化槽設置部分で調査を行い、赤褐色土層を確認した。遺構検出面とも考えられるが、既



第８図　第142-11，12次調査区位置図（１：4,000　※左 142-11，右 142-12）

設浄化槽設置時に改変されているものと思われる。遺構及び遺物は、確認することができなかった。

（小濵　学）

15　第142-15次調査（６AM13）

調査場所　多気郡明和町斎宮字楽殿2875-３

原　　因　住宅改築

調査期間　平成15年４月22日

調査面積　２㎡

概況）　調査地は歴史の道の南側100mに位置している。現況は住宅地で、標高は約10.5m、遺構面は黄灰色粘質土で、標高約9.6m前後で確認できる。

遺構と遺物）　調査区内で確認した赤褐色土層については、遺構面とも考えられるが、撹乱を受けている可能性もあり、本来の遺構検出面のレベルではないことが考えられる。遺構及び遺物は、確認することができなかった。

（小濵　学）

16　第142-16次調査（６AK７・L７）

調査場所　多気郡明和町竹川字古里575-１

原　　因　駐車場及び庭園

調査期間　平成16年３月９日～31日

調査面積　480㎡

概況）　史跡地内西部の北端部あたり、斎宮歴史博物館大駐車場のすぐ北にあたる。周辺では、同一施工者による現状変更調査の第31-６次調査や、県道改良工事に伴う第85-４次調査が実施されている。

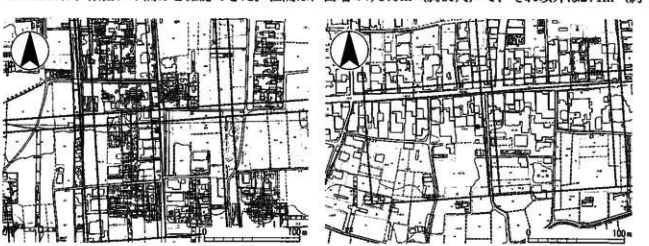
当調査は、住宅増築に伴いその全域を対象として実施したものである。なお、事業面積が大きいため、調査は２分割して行うこととなった。当調査はそのうちの東半部にあたる。西半部は平成16年度に第145-１次調査として実施されている。

現地表面の標高は約10.8mである。遺構面は橙褐色粘質土で、標高約10.1m前後で確認できる。なお、調査区西部には黒色土が厚く堆積していた。本来はこの黒色土上面にて多くの遺構が検出できるものと考えられるが、判別できなかったため、遺構が明確に認識できる橙褐色粘質土層まで下げて検出を行った（その時に第19図55～59が出土）。

遺構と遺物）　柱列３条、井戸２基、区画溝３条のほか、小規模な溝を数条確認した。

柱列　柱列は、掘形が直径40cm程度の円形を呈するものが４列ほど見られる。いずれも掘立柱建物としてはまとまらないものの、柱列としては明確であるため、何らかの区画を意識した柱列であると考えられる。

ＳＡ8989は、東西に６間ほど確認できた。柱間は、西端のみ3.0m（約10尺）で、それ以外は2.4m（約



第９図　第142-13，14次調査区位置図（１：4,000　※左 142-13，右 142-14）

８尺）の等間となる。東から２基目の柱穴には、南北方向に延びる柱列が伴う。したがって、ＳＡ8989は全体としてＴ字形を呈するものとなっている。

ＳＡ8990はＳＡ8989の西端に重複するもので、南北に３間分を確認した。柱間は2.2m（約７尺）の等間である。

ＳＡ8991は、調査区南部の溝ＳＤ8977北岸で検出した。３間分で、柱間は2.6m（約９尺）である。

柱列に伴うピットからの出土遺物はいずれも少なく、時期は決しがたい。柱掘形の形状から見て、ＳＡ8989とＳＡ8990は斎宮Ⅲ期以降と考えられる。ＳＡ8991はそれよりもやや古い斎宮Ⅱ期の範疇に収まる可能性がある。

井戸　井戸は２基確認した。いずれも完掘はしていない。

ＳＥ8979は、長軸約2.1mの楕円形を呈する掘形である。遺構検出面から約1.8mほどまでを掘削した。枠痕跡は明確でないが、おそらくは木組であったと考えられる。廃絶時の埋土内から斎宮Ⅱ－３段階に相当する土師器杯（第19図43）が出土しているため、平安時代の中頃には廃絶したものと考えられる。

ＳＥ8973は長軸約3.0mの楕円形を呈する掘形である。遺構面から約1.2mまでを掘削した。石組を示すような礫が出土しなかったため、この井戸も木枠と考えられる。廃絶時の埋土内から藤澤良祐氏による山茶椀編年の第４～５型式に相当する椀（第19図49･50）が出土しているため、12世紀後葉頃には廃絶したものと考えられる。[5]

なおＳＥ8973には、ＳＤ8977が取り付いている。ＳＤ8977は幅約30cm、深さ約10cm程度の小規模なもので、南端でＳＤ8974に接続している。ＳＥ8973に伴う排水溝と考えられる。

溝　区画溝と考えられる溝ＳＤ8969・8974・8975の他に、小規模な溝をいくつか確認した。

ＳＤ8975は幅約70cm、深さ約30cmのもので、断面は逆台形に近い。重複関係からＳＤ8974に先行することは明らかである。出土遺物には明確なものが無いため、所属時期は不明だが、ＳＤ8974との関係から考えて、平安時代にまで遡る可能性が考えられる。

ＳＤ8974は幅約1.2m、深さ約60cmで、断面Ｕ字形を呈する。埋土内からは中世Ⅱｂ期の土器類が出土するため、13世紀中葉頃に廃絶したものと考えられる。ＳＤ8976はＳＤ8974に平行するもので、埋土の状況も類似することから、ほぼ同時期のものと考えられる。両溝間が道として機能していたとも考えられる。

南北方向のＳＤ8969は、西側の肩部のみを確認した。埋土内からは明確な土器が出土していないが、埋土中に近世土器や桟瓦片を含むため、近世には廃絶した遺構と考えられる。

調査区中央付近には、南北方向の小溝群が見られる。ＳＡ8989の東西列にあたる位置で終息するものが多い。畠地に伴う遺構である可能性が考えられる。

土坑　土坑は、調査区北部で数基確認した。

ＳＫ8978・8981は一連の遺構と考えられる。ＳＫ8978は浅く、遺構底面には人為的に踏み固められた整地層が見られた。ＳＫ8981は円形を呈したもので、検出面からの深さは約40cmである。いずれも埋土中に、藤澤良祐氏による山茶椀編年の第５型式の遺物（第19図44～46）を含んでいる。

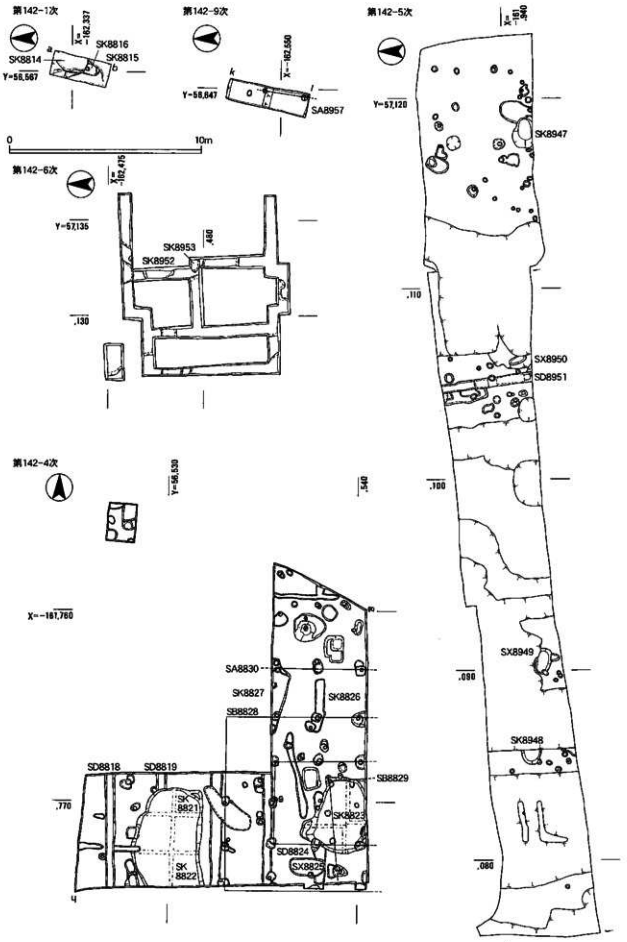
ＳＫ8988は、長辺約2.0m、短辺約50cmの長方形を呈した土坑である。検出面からの深さは10cm足らずであるが、この付近は黒色土が厚く堆積していたため、本来はもう少し深い遺構であったと考えられる。形態から土壙墓の可能性もあるが、明確な遺物は出土していない。

第10図　第142-15次調査区位置図（１：4,000）

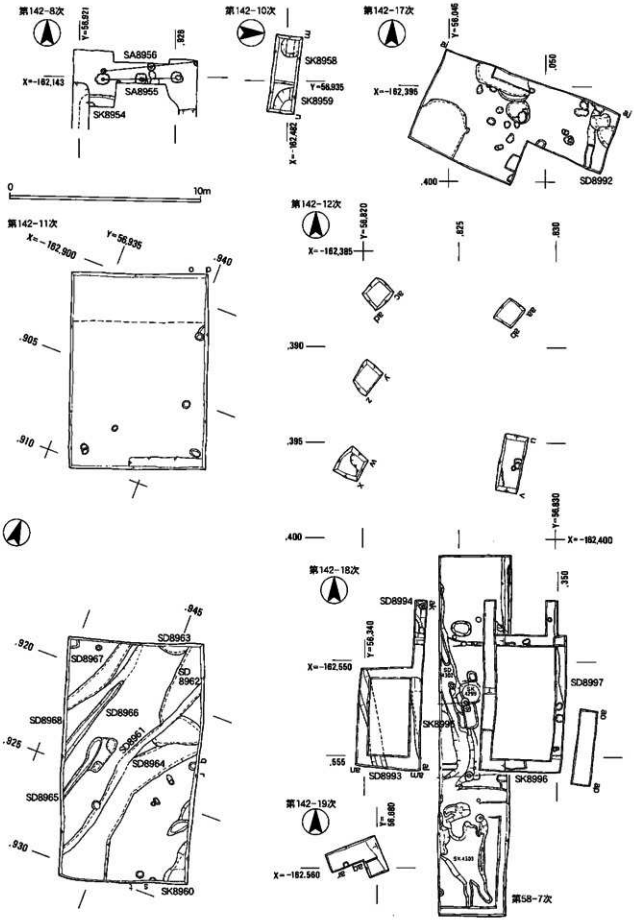
小結）　今回の調査区は、引き続き実施された第145-１次調査の成果と併せて考える必要があるため、ここでは調査区内の状況を簡単に触れておく。今回の調査区からは時期の異なる井戸２基が検出され、断続的ながら居住域として用いられた場所と考えられる。柱列は、「井戸屋敷」のよう

な区域を囲むものであった可能性がある。区画溝はいずれも中世から近世にかけてのものである。区画溝の方向は、当調査区の旧地籍図（明治35年段階）の地割方向とも一致する。当調査区付近の中世以前を考察するにあたっては、地籍図の状況を参照していくことが必要である。（伊藤裕偉）

第11図　第142-16，17，18，19次調査区位置図（1：4,000）



第12図　第142-1，4，5，6，9次調査区平面図（1：200）



第13図　第142-8，10，11，12，17，18，19次調査区平面図（1：200）

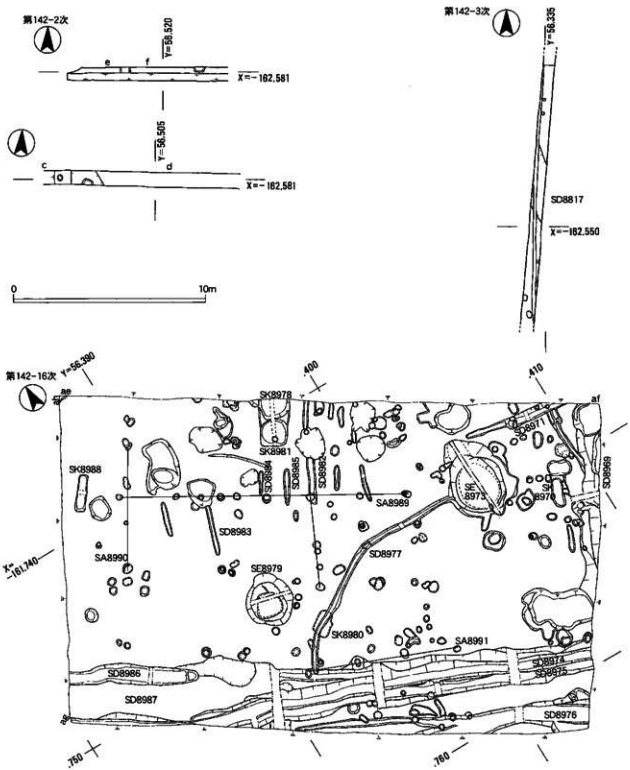
17　第142-17次調査（６ＡＨ11）

調査場所　多気郡明和町竹川字中垣内455-１,-２

原　　因　建物改築

調査期間　平成16年３月10日～12日

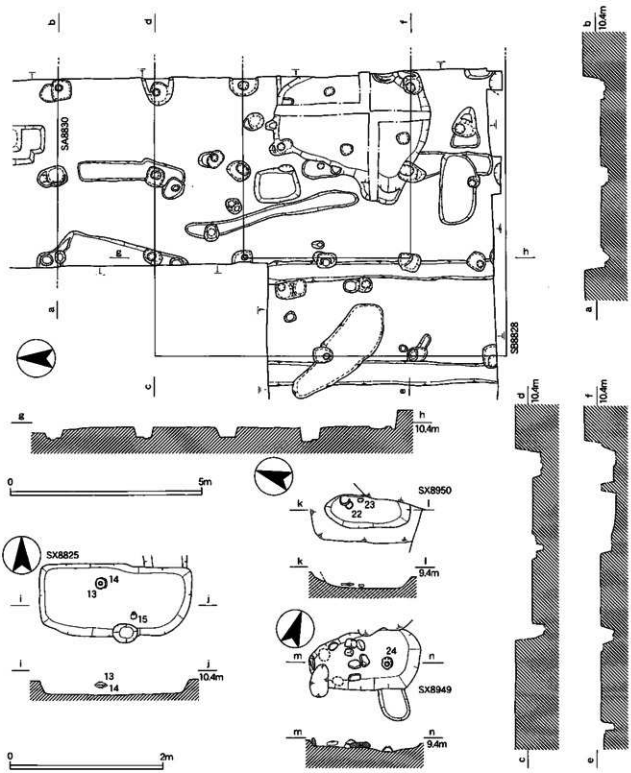
調査面積　45㎡



第14図　第142-２，３，16次調査区平面図（１：200）

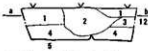
概況） 調査地は、斎宮小学校から西へ300mに位置する。建物改築などに伴う調査である。現況は畑地で標高は約12.9m、遺構面はにぶい赤褐色粗砂で、標高約12.4m前後で確認できる。

遺構と遺物） 調査区内では、中世に属すると考えられる溝１条と時期不詳の柱穴を多数確認した。遺物についても、中世以降ものが主体である。 （小濵　学）



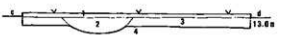
第15図　ＳＢ8828，ＳＡ8830，ＳＸ8825・8949・8950平面、断面図（１：50，ＳＢ8828，ＳＡ8830は１：100）

第142-1次



1 盛土　2 撹乱　3 盛土
4 暗褐色土　5 明赤褐色土(遺構検出面)

第142-2次



1 アスファルト　2 灰褐色土、黄色土混入
3 灰褐色土　4 黄色粘土(遺構検出面)

1 アスファルト　2 暗褐色土
3 黒褐色土　4 明黄灰色土
(遺構検出面)

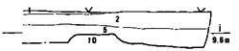
第142-4次

1 表土　2 灰色土土替混入　3 黒褐色土(遺構検出面か)　4 黒色土
5 灰色土、浅黄色土混入　6 オリーブ黒色土、黄色土混入　7 黒褐色シルト

8 黒色土、黄褐色土ブロック混入　9 黒褐色土　10 オリーブ黒色土、黄色ブロック混入　11 黒色土
12 黒色シルト　13 黒色土にオリーブ黄色土混入　14 暗灰黄色土(遺構検出が可能な面)

第142-5次

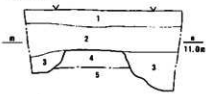
1 盛土　2 盛土(砂)　3 盛土(砕石)　4 撹乱(現代)　5 整地土(現代)
6 整地土(現代)　7 撹乱(旧陸軍用地期か)　8 黒褐色土、黄色土ブロック混入
9 明黄褐色粘土(遺構検出面)　10 明赤褐色粘土(遺構検出面)



第142-9次

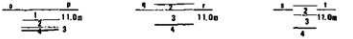
1 表土　2 盛土　3 黒褐色シルト
4 黒褐色土土替混入　5 黒褐色粘質土
6 黒褐色土、明黄褐色土混入　7 明黄褐色土(遺構検出面)

第142-10次



1 表土
2 撹乱土
3 褐灰色粘質土
4 赤褐色粘質土
5 黄褐色砂礫混土(遺構検出面)

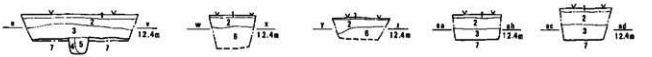
第142-11次



1 表土　2 盛土
3 黒褐色土　4 赤褐色土(遺構検出面)

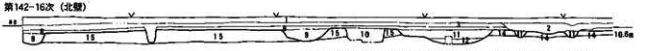
第16図　第142次調査土層断面図①（1：100）

第142-12次



1 砕石　2 盛土　3 黒色土土器混入　4 黒褐色土　5 黒色土　6 撹乱土　7 明赤褐色粘質土(遺構検出面)

第142-16次（北壁）



1 表土　2 撹乱土　3 にぶい黄褐色土　4 灰褐色土　5 オリーブ褐色土
6 暗灰黄色土、黄色ブロック混入　7 暗灰黄色土礫混入　8 黒褐色土

9 黒色土、黄色粒含む　10 黒褐色土、黄色粒含む　11 黒褐色土
12 明黄褐色土、黒色土混入　13 暗褐色土、黄色粒含む　14 黒色土小礫混入
15 黒色土　16 暗褐色土(一部、黄褐色土)

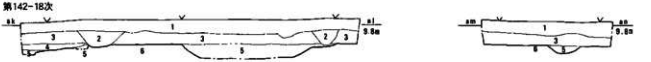
第142-16次（西壁）

1 撹乱　2 表土　3 にぶい黄褐色土　4 黒褐色土　5 黒褐色土
6 黒褐色土　7 黒褐色土　8 黒色土　9 黒色土土器混入
10 黒色土　11 暗褐色土(一部、黄褐色土)

第142-17次

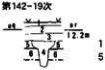
1 耕作土　2 客土　3 黒褐色砂質土　4 撹乱土　5 撹乱土
6 暗赤褐色砂質土　7 黒褐色土　8 にぶい赤褐色粘砂(遺構検出面)

第142-18次



1 表土　2 褐灰色土礫混入　3 黒色土　4 黒色シルト
5 黒褐色土、にぶい黄褐色土混入　6 にぶい黄褐色粘質土(遺構検出面)

第142-19次



1 砕石　2 盛土　3 黒褐色土　4 黒色土
5 オリーブ黒色土　6 橙色粘質土(遺構検出面)

第17図　第142次調査土層断面図②（1：100）

18　第142-18次調査（６ＡＲ13）

調査場所　多気郡明和町斎宮字中西611

原　　因　建物建築等

調査期間　平成16年３月19日～23日

調査面積　32㎡

概況）　竹神社から東250m付近に位置する住宅地において調査を行った。現況は住宅地で標高は約9.9m、遺構面はにぶい黄褐色土で、標高約9.4m前後で確認できる。

遺構と遺物）　調査の成果としては、古代～中世に属すると考えられる溝２条・土坑１基・時期不祥の柱穴を確認した。昭和61年度に第58-７次調査を行った部分と今回の調査区の中央が重複している。

（小濵　学）

19　第142-19次調査（６ＡＮ13）

調査場所　多気郡明和町斎宮字牛葉115

原　　因　浄化槽設置

調査期間　平成16年３月30日～31日

調査面積　3.8㎡

概況）　調査地点は、斎宮駅から南100m、参宮街道沿いに所在する宅地内である。方格地割木葉山西区画内に位置する。現況は住宅地で標高は約12.4m、遺構面は橙色粘質土で、標高約11.7m前後で確認できる。オリーブ黒色土上面で遺構検出が可能であるが、遺構の埋土が同色系であるため判然としなかったので、橙色粘質土上面まで掘削した。

遺構と遺物）　調査の成果としては、柱穴１基を確認した。また、以前埋設されていた漬物槽により一部が撹乱を受けていることが判明した。

（小濵　学）

註

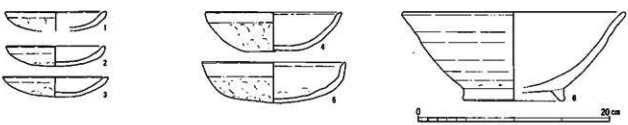
(1)　泉雄二・倉田直純ほか「斎宮跡の土器」（『斎宮跡発掘調査査報告』Ⅰ　斎宮歴史博物館、2001年）を参照した。本文中の表記としては斎宮〇一〇段階とした。

(2)　藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」（『研究紀要』第３号　三重県埋蔵文化財センター、1994年）を参照した。

(3)　伊藤裕偉「Ⅵ　調査のまとめと検討」（『岩出地区内遺跡群発掘調査報告』、三重県埋蔵文化財センター、1996年）による。

(4)　九州近世陶磁学会編『九州陶磁の編年』（2000年）

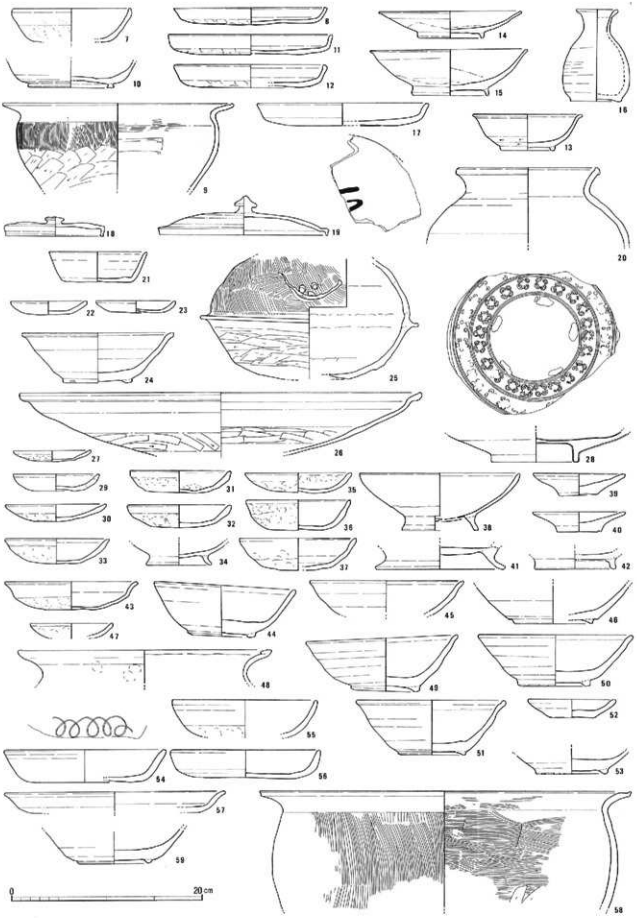
(5)　(2)に同じ。



（次項も含む。）

1～5：第142-1次　SK8816	6：第142-1次　SK8814	7～10：第142-4次　SK8821	11・12：第142-4次　SK8822
13：第142-4次　SK8827	14～16：第142-4次　SX8825	17～20：第142-4次　包含層	21：第142-8次　SA8955
22・23：第142-5次　SX8950	24：第142-5次　SX8949	25～27：第142-6次　SK8952	28：第142-7次　包含層
29～34：第142-11次 SD8962	35～42：第142-11次 SD8968	43：第142-16次　SE8979	44～46：第142-16次 SK8978
47～50：第142-16次 SE8973	51～53：第142-16次 SD8974	54：第142-16次　y12pit1	55～59：第142-16次　黒色土

第18図　第142次調査出土遺物①（１：４）



第19図　第142次調査出土遺物②（1：4）

遺構遺物番号	性格	次数	調査時遺構名	地区	グリッド	時期	出土位置	遺構の性格・遺物・その他
SK8814	土坑	142-1	土坑1	M11		縄台		土師器甕、陶器擂鉢が出土。
SK8815	土坑	142-1	土坑2	M11		平安後	Ⅲ	土師器甕、須恵器小片、黒色土器片が出土。
SK8816	土坑	142-1	土坑3	M11		平安後	Ⅲ-3	土師器甕が出土。
SD8817	溝	142-3	溝2	K13				山茶碗（6～7型式）が出土。
SD8818	溝	142-4	溝1	M6	gl8-19			焼丸か。
SD8819	溝	142-4	溝2	M6	hl8-19			焼丸か。
SD8820	溝	142-4	溝3	M6	jl8-19			焼丸か。
SK8821	土坑	142-4	土坑4	M6	hl8	平安中	Ⅱ-3	土師器杯・鍋・甕、須恵器杯Bが出土。
SK8822	土坑	142-4	土坑5	M6	hl9	平安前	Ⅱ-1	土師器甕・杯、須恵器小片が出土。
SK8823	土坑	142-4	土坑6	M6	jl8	奈良	Ⅰ	土師器杯・甕が出土。
SD8824	溝	142-4	溝7	M6	jl9			焼丸か。
SX8825	土壙墓	142-4	土坑8	M6	jl9	平安末		灰釉陶器椀・皿・底、土師器小片が出土。
SK8826	土坑	142-4	溝9	M6	jl7			焼丸か。
SK8827	土坑	142-4	土坑10	M6	jl7	平安末～鎌台		山茶、土師器皿・甕が出土。
SK8848	土坑	142-5	土坑1	R7	vl1	近世		土師器焙烙・皿、陶器甕・壺・擂が出土。
SX8849	土壙墓	142-5	中世墓2	R7	wl1	鎌台		土師器台付皿・甕・鍋（南伊勢系）、山茶碗（6型式）が出土。
SX8850	土壙墓	142-5	中世墓3	S7	bl1	平安末～	Ⅲ-3以降	ロクロ土師器椀・小皿出土。
SD8851	溝	142-5	溝4	S7	bl0-11			
SK8852	土坑	142-6	土坑1	S12		近世		土師器、陶器擂鉢が出土。
SK8853	土坑	142-6	土坑2	S12				
SK8854	土坑	142-8	土坑3	Q9				
SK8858	土坑	142-10	土坑1	Q12				
SK8859	土坑	142-10	土坑2	Q12		中世		土師器茶碗・鍋が出土。
SK8860	土坑	142-11	土坑1	Q7		中世		陶器甕、土師器が出土。
SD8861	溝	142-11	溝2	Q7		縄台		土師器皿、灰釉陶器甕、須恵器小片が出土。
SD8862	溝	142-11	溝3	Q7		平安後	Ⅲ-2～3	土師器台付椀・皿・小皿、瀬村窯が出土。
SK8863	土坑	142-11	土坑6	Q7				
SD8864	溝	142-11	溝7	Q7		縄台		陶器甕・壺、土師器皿、山茶碗、山皿が出土。
SD8865	溝	142-11	溝9	Q7		中世		陶器壺・鉢鉢、土師器壺・皿が出土。
SD8866	溝	142-11	溝10	Q7		縄台		土師器皿・壺、陶器壺、山茶碗？が出土。
SD8867	溝	142-11	溝11	Q7		中世か		土師器壺・鍋が出土。
SD8868	溝	142-11	溝12	Q7			Ⅲ-2～3	土師器小皿・皿・台付皿・椀、ロクロ製土師器小皿、灰釉陶器椀が出土。
SD8869	区画溝	142-16	溝1	L5	cl3～Bl5	近世		瓦片、埋土に混雑
SK8870	土坑	142-16	土坑2	L5	b-cl3	近世		灰色埋土
SD8871	溝	142-16	溝3	L5	b-cl2	平安以前？		黒褐色埋土
SD8872	溝	142-16	溝4	L5	bl3	近世		灰色埋土、後いも、図は遺構略図のみ
SE8873	井戸	142-16	井戸5	L5	a-bl2-13	中世Ⅰ		山茶碗5型式「薬師寺」
SD8874	区画溝	142-16	溝6	L5	bl5～	中世Ⅱ		埋土は褐色・縞模、山茶碗型式
SD8875	区画溝	142-16	溝7	L5	bl5～	中世Ⅰ以前		黒褐色埋土
SD8876	溝	142-16	溝8	L5	al6	近世以降		灰色埋土
SD8877	溝	142-16	溝9	L5・K5	L5a13～	中世？		SE8872と SD8874に接続　排水溝か
SK8878	土坑	142-16	土坑10	K5	y10-11	中世Ⅰ		埋土下層は人為的に埋めて固める
SE8879	井戸	142-16	井戸11	K5	w-xl2-13	平安中期	Ⅱ-3	曲げ輪り「山根り」
SK8880	土坑	142-16	土坑12	K5	xl3	平安？		SD8877より古い。
SK8881	土坑	142-16	土坑13	K5	yl1	中世Ⅰ		SX8878と隣接
SD8882	溝	142-16	溝14	K5	yl1-12			後い
SD8883	溝	142-16	溝15	K5	wl1-12			
SD8884	溝	142-16	溝16	K6	xl1			
SD8885	溝	142-16	溝17	K5	xl1-12			
SD8886	溝	142-16	溝18	K5	u-vl2-13	中世		上層は灰色土
SD8887	溝	142-16	溝19	K5	ul3			下層は黒色土
SK8888	土坑	142-16	土坑20	K5	vl0	平安		土壙墓か？
SD8892	溝	142-17	溝1	H11	n25			
SD8893	溝	142-18	溝1	R13				
SD8894	土坑	142-18	土坑2	R13				
SK8895	土坑	142-18	土坑3	R13				
SK8896	土坑	142-18	土坑4	R13				
SD8897	溝	142-18	溝5	R13				

第2表　遺構一覧表

遺構番号 遺構名	整理時遺構名	調査次数	地区	グリッド番号	ピット番号	ピット遺物の時期	遺物時期	規模 東西間(m)×南北間(m)	柱間 (東西～南北)	主軸	方位 (N基準)	備考
SB8828	掘立柱建物11	142-4	M6	i18	pit 1	土師器小片	Ⅱ-1～2	身2(4.6)＋×2(4.6)＋ 庇3(6.9)＋×3(6.9)＋	身2.3-2.2 庇2.3-2.3	東西	N0°	
				i19	pit 1	土師器杯蓋・甕・鍋						
					pit 2	土師器小片						
				k17	pit 1	土師器小片						
					pit 2	土師器杯						
SB8829	掘立柱建物12	142-4	M6				Ⅱの範囲	1(3.2)＋×1(＊)＋	3.2-＊	南北？	N4°W	
SA8830	柱列13	142-4	M6	j16	pit 3	土師器甕	Ⅱの範囲	2(4.6)＋	2.3	東西	N0°	
				k16	pit 2	土師器皿片、須恵器杯						
SA8955	柱列2	142-8	Q9		pit 1	土師器小片	Ⅱ-2	2(3.8)＋×＊	1.9-＊	東西？	N0.5°E	東西柱列のみ
					pit 2	土師器甕、須恵器杯B						
					pit 3	土師器小片						
SA8956	柱列3	142-8	Q9		pit 4	土師器杯・甕	Ⅱ	2(4.5)＋×＊	2.25-＊	東西？	N6°E	東西柱列のみ
					pit 5	土師器甕						
SA8957	柱列1	142-9	N13				Ⅱ？	1(2.1)＋	2.1	南北？	N9.5°E	
SA8989	柱列21	142-16	K5				Ⅲ？	6(15.3)×2(4.8)	2.4-3.0-2.4	東西	N60°W	南北の柱列は付属的
SA8990	柱列22	142-16	K6				Ⅲ？	3(6.6)	2.2	南北	N30°E	柱列11と直交
SA8991	柱列23	142-16	K5				Ⅱ？	3(7.8)	2.6	東西	N70°W	

第3表　掘立柱建物等一覧表

No.	遺構種類	出土遺構	器種	法量(mm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録No.
1	142-1	M11 SK0404	土師器 小皿	口径 底径	口:ヨコナデ, 外:ナデ&ユビオサエ・ナデ, 内:ナデ	やや密	良	浅黄橙10YR8/3	口3/12		001-07
2	142-1	M11 SK0404	土師器 小皿	口径 底径	口:ヨコナデ, 外:ユビオサエ・ナデ, 内:ナデ	密	良	橙7.5YR7/6・浅黄橙10YR8/4	口1/12		001-04
3	142-1	M11 SK0404	土師器 小皿	口径 底径	口:ヨコナデ, 外:ユビオサエ・ナデ, 内:ナデ	やや密	良	橙7.5YR7/6	口口底1/12		001-06
4	142-1	M11 SK0404	土師器 皿	口径 底径	口:ヨコナデ, 外:ヨコナデ・ナデ, 内:ナデ	密	良	浅黄橙10YR8/3・8/4	口口底1/12		001-03
5	142-1	M11 SK0404	土師器 皿	口径 底径	口:ヨコナデ, 外:ヨコナデ・ナデ, 内:ナデ	やや密	良	浅黄橙10YR8/3	口6/12		001-02
6	142-1	M11 SK0404	陶器系 皿	口径 底径	口:ロクロナデ, 外:ロクロナデ→ロクロケズリ→貼付テザーム様, 内:ロクロナデ	密	良	灰白7.5Y7/1	口2/12 底2/12	外面に白色粒	001-05
7	142-4	M06c19 SK0201	土師器 皿	口径	口:ヨコナデ, 外:ナデ, 内:ナデ	やや密	良	浅黄橙10YR8/4・8.5R4/3・浅黄橙10YR7/3	口3/12		003-04
8	142-4	M06c19 SK0201	土師器 皿	口径	口:ヨコナデ, 外:ナデ・ナデ, 内:ナデ	やや密	良	橙7.5YR7/6, 内:橙7.5YR7/6	口2/12		004-02
9	142-4	M06c19 SK0201	土師器 皿	口径	口:ヨコナデ, 外:ヨコナデ→貼付高台→ヨコナデ, 内:ハケ&ユビオサエ・ナデ	やや密	良	外:明赤褐5YR5/8, 内:浅黄橙7.5YR8/3	口3/12		004-01
10	142-4	M06c19 SK0201	瓦器系 皿	底径	外:ロクロナデ→貼付高台→ナデ, 内:ロクロナデ	やや密	良	暗褐10YR3/3・N2/0/0	底3/12		003-03
11	142-4	M06c19 SK0201	土師器 皿	口径 底径	口:ヨコナデ, 外:ケズリ, 内:ユビによるナデ	やや密	良	橙7.5YR7/6	口1/12		004-03
12	142-4	M06c19 SK0201	土師器 皿	口径	口:ヨコナデ, 外:ナデ・オサエ, 内:ナデ	やや密	良	橙7.5YR6/6	口1/12		004-04
13	142-4	M06c17 SK0202	瓦器系 椀	口径 底径	口:ヨコナデ, 外:ロクロナデ→ロクロケズリ→貼付テザ, 内:ヨコナデ	密	良	灰白2.5Y8/2	口2/12 底3/12		004-01
14	142-4	M06c1 SK0202	瓦器系 椀	口径 底径	口:ロクロナデ, 外:ロクロナデ→貼付高台→ヨコナデ, 内:ロクロナデ	やや密	良	灰白2.5Y6/1・浅黄橙2.5Y7/3・10YR8/4	口2/12 底3/12	外内部剥離	003-05
15	142-4	M06c19 SK0205	瓦器系 椀	口径 底径	口:ヨコナデ, 外:ロクロナデ→貼付高台→ヨコナデ, 内:ヨコナデ	やや密	良	にぶい黄橙10YR7/2・浅黄2.5Y	口3/12 底3/12	外内部剥離	002-01
16	142-4	M06c19 SK0205	瓦器系 椀	口径 底径	口:ロクロナデ, 外:ヨコナデ→高台ヨコナデ, 内:ヨコナデ	やや密	良	灰7.5Y8/2・8/1・7/1	口1/12 底2/12	脚?	002-02
17	142-4	M06c16 SK0204	土師器 皿	口径 底径	口:ヨコナデ, 外:ナデ, 内:ナデ	やや密	良	にぶい黄橙10YR7/4	口1/12	底部に墨書	002-03
18	142-4	M06c18 SK0204	瓦器系 椀	口径 底径	口:ロクロナデ→ロクロケズリ→貼付テザ, 内:ロクロナデ	密	良	灰7.5Y8/1・10YR6/1	口6/12底		003-05
19	142-4	M06c17 SK0202	瓦器系 椀	口径 底径	口:ロクロナデ→ロクロケズリ→貼付テザ, 内:ロクロナデ	やや密	良	灰7.5Y7/1・浅黄2.5Y6/1・灰7.5Y6/2	口1/12 外表面剥落	外面に黒斑がある	003-02
20	142-4	M06c18 SK0204	土師器 皿	口径	口:ヨコナデ, 外:ハケ&ナデ, 内:ハケ&ナデ	やや密	良	灰7.5Y7/1・浅黄2.5Y6/1	口6/12	外面に黒斑がある	003-01
21	142-9	Q9 Pit0005	須恵器 甕	口径 底径	口:ヨコナデ, 外:ヨコナデ・ハケ目ミガキ, 内:ヨコナデ	密	良	8GY6/0	口2/12	内面	009-03
22	142-5	Q7b11 Pit0001	土師器 皿	口径 底径	口:ナデ, 外:ナデ, 内:ナデ	密	良	にぶい橙7.5YR7/4	口口底1/12		006-05
23	142-5	Q7b11 SX0005	土師器 皿	口径 底径	口:ヨコナデ, 外:ナデ, 内:ナデ	やや密	良	浅黄橙7.5YR8/4	口3/12		006-03
24	142-5	R7e11 SX0005	陶器 椀	口径 底径	口:ロクロナデ, 外:ロクロナデ→貼付テザ→赤褐可鉄, 内:ロクロナデ	密	良	灰白2.5Y6/2	口3/12 台1/12	胎土中、白粒多、セミ質ヘラ目	006-02
25	142-6	S12 SK0052	土師器 小皿		外:ハケ&ユビ, 0.5cm→貼付テザ→ヨコ, 内:ナデ・オサエ→ユビによるナデ	密	良	明黄褐7.5YR6/6, 内:明黄褐5YR6/8		外面スス付着	009-04
26	142-6	S12 SK0052	土師器 皿	口径 底径	口:ヨコナデ, 外:ナデ・ケズリ・ナデ, 内:ナデ→ケズリ→ナデ	やや密	良	にぶい橙7.5YR6/4	口4/12	外面スス付着	006-01
27	142-6	S12 SK0052	土師器 皿	口径 底径	口:ヨコナデ, 外:ナデ・オサエ, 内:ナデ	密	良	橙5YR6/8	口6/12	底部	006-06
28	142-7	R12 Pit0001	陶器系 椀台付	口径 底径	口:ロクロナデ後施釉→ケズリ出し, 外:ロクロナデ後施釉	密	良	黒N2/0, 黒:オリーブ黒7.5Y3/1・10GY5/1	高台1/12	底部底	007-01
29	142-11	Q7 SK0002	土師器 皿	口径 底径	口:ヨコナデ, 外:ナデ・オサエ, 内:ナデ	やや密	良	灰白2.5Y8/2	口2/12		012-09
30	142-11	Q7 SK0002	土師器 皿	口径 底径	口:ヨコナデ, 外:ナデ・オサエ, 内:ナデ	やや密	良	浅黄橙10YR8/4	口3/12		012-05
31	142-11	Q7 SK0002	土師器 皿	口径 底径	口:ヨコナデ, 外:ナデ・オサエ, 内:ナデ・スス付	密	良	浅黄橙10YR8/4, 内:灰7.5YR7/6	口9/12	黒ぶあり, 胴代, 外内部剥落	009-04
32	142-11	Q7 SK0002	土師器 皿	口径 底径	口:ヨコナデ, 外:ナデ・ナデ・ハケ?, 内:ナデ	やや密	良	にぶい橙7.5YR7/4・灰7.5YR7/6	口7/12		012-04
33	142-11	Q7 SK0002	土師器 皿	口径 底径	口:ヨコナデ, 外:ナデ・オサエ, 内:ナデ	やや密	良	橙5YR7/6		内面に油煙痕付着	017-07
34	142-11	Q7 SK0002	土師器 皿	口径 底径	口:ヨコナデ, 外:ナデ・スス付, 内:ナデ	やや密	良	灰白2.5Y8/2	口2/12	母粒している	012-08
35	142-11	Q7 SK0002	土師器 皿	口径 底径	口:ヨコナデ, 外:ナデ・ナデ・オサエ, 内:ナデ・オサエ	密	良	明黄橙5.5YR6/4, 内:浅黄橙10YR8/4	口口底1/12		008-03
36	142-11	Q7 SK0002	土師器 皿	口径 底径	口:ヨコナデ, 外:ユビオサエ・ナデ, 内:ユビによるナデ	密	良	浅黄橙10YR8/3	口3/12		008-02
37	142-11	Q7 SK0002	土師器 皿	口径 底径	口:ヨコナデ, 外:ナデ・ナデ・オサエ, 内:ナデ	密	良	浅黄橙10YR8/3・7.5YR8/3	口3/12		014-03
38	142-11	Q7 SK0002	土師器 皿	口径 底径	口:ヨコナデ, 外:ナデ・ナデ・オサエ, 内:ナデ	やや密	良	浅黄橙10YR8/3, 内:にぶい黄橙10YR8/3	口1/12		013-02
39	142-11	Q7 SK0002	土師器 皿	口径 底径	口:ヨコナデ, 外:ナデ・ナデ・オサエ, 内:ナデ	やや密	良	灰白7.5Y8/1	口3/12		013-07
40	142-16	K3c13 SK0010	須恵器 椀	口径 底径	口:ヨコナデ, 外:ナデ・ナデ・オサエ, 内:ナデ	密	良	黒N2/0	口1/12		017-03
41	142-16	K3c14 SK0010	須恵器 椀	口径 底径	口:ヨコナデ, 外:ヨコナデ→貼付テザ→高台ヨコナデ, 内:ヨコナデ	やや密	良	灰白2.5Y8/2	口4/12 底2/12	胎土中、白粒多	019-08
42	142-16	K3c19 SK0010	須恵器 椀	口径 底径	口:ヨコナデ, 外:ヨコナデ→貼付テザ→高台ヨコナデ, 内:ヨコナデ	やや密	良	灰白2.5Y8/2	口2/12	胎土中、白粒多	011-01
43	142-16	K3c19 SK0010	須恵器 椀	口径 底径	口:ヨコナデ, 外:ヨコナデ→貼付テザ, 内:ヨコナデ	やや密	良	灰白2.5Y8/2	口3/12	胎土中、白粒多	011-02
44	142-16	K3c19 SK0010	須恵器 椀	底径	外:ヨコナデ→貼付テザ, 内:ヨコナデ	やや密	良	灰白2.5Y8/2	底3/12	胎土中、白粒多	010-02
45	142-16	L3b13 SK0010	土師器 小皿	口径 底径	口:ヨコナデ, 外:ナデ・ナデ・オサエ, 内:ナデ	やや密	良	にぶい黄橙10YR7/4	口3/12		013-02
46	142-16	L3b13 SK0010	土師器 皿	口径 底径	口:ヨコナデ, 外:ナデ・ナデ・オサエ, 内:ナデ	やや密	良	浅黄橙7.5YR8/3, 内:にぶい黄橙10YR8/3	口3/12		011-01
47	142-16	L3b13 SK0010	陶器 椀	口径 底径	口:ヨコナデ, 外:ナデ・ナデ・オサエ, 内:ナデ・白粒多→貼付テザ→ヨコナデ	密	良	灰白2.5Y7/2	口1/12 高台7/12	胎土中、白粒多, 胎土目, 高台	016-01
48	142-16	L3b13 SK0010	陶器 椀	口径 底径 5.2→6.0	口:ロクロナデ, 外:ロクロナデ→貼付テザ→セミ目ヘラ目→高台ヨコナデ, 内:ロクロナデ	密	良	明黄10YR7/6	口6/12 高台7/12	外内面スス付, 胎土中, 高台	016-03
49	142-16	L3c12 SK0010	陶器 椀	口径 底径 5.4	口:ロクロナデ, 外:ロクロナデ→貼付テザ→高台ヨコナデ, 内:ヨコナデ	密	良	灰白2.5Y7/1	口1/12 高台7/12	胎土中、白粒多	016-04
50	142-16	K3c14 SK0010	陶器 椀	口径 底径 5.7	口:ロクロナデ, 外:ロクロナデ→高台ヨコナデ, 内:ヨコナデ	やや密	良	灰白2.5Y7/1	口2/12	胎土中、白粒	014-06
51	142-16	K3c14 SK0010	陶器 椀	口径 底径 1.0	口:ロクロナデ, 外:ロクロナデ→高台ヨコナデ, 内:ロクロナデ	やや密	良	灰白2.5Y7/2	口2/12	胎土中、白粒	014-05
52	142-16	K3c14 SK0010	陶器 椀	口径 底径 3.4	口:ロクロナデ→貼付テザ→ヨコナデ, 内:ロクロナデ	やや密	良	灰白N8/0	口7/12	白粒多	013-04
53	142-16	K3c12 SK0010	土師器 皿	口径 底径	口:ヨコナデ, 外:ナデ・ナデ, 内:ナデ	やや密	良	橙5YR7/6	口3/12	内面剥落	012-06
54	142-16	K3c12 SK0010	土師器 皿	口径 底径	口:ヨコナデ, 外:ナデ・オサエ, 内:ナデ	やや密	良	灰白2.5Y7/2・7.5YR7/4	口2/12		012-05
55	142-16	K3c11 SK0010	土師器 皿	口径 底径 3.0	口:ヨコナデ, 外:ケズリ, 磨滅のため詳細不明瞭	粗	良	橙5YR7/8	口3/12		015-01
56	142-16	K3c11 SK0010	土師器 皿	口径 底径	口:ヨコナデ, 外:ナデ・ナデ・オサエ, 内:ナデ	やや密	良	橙5YR6/6	口3/12	表面剥	011-03
57	142-16	K3c12 SK0010	土師器 皿	口径 底径	口:ヨコナデ, 外:ハケ&ナデ→ユビ, 内:ハケ&ナデ→ユビ・ケズリ	密	良		口1/12		015-02
58	142-16	K3c12 SK0010	陶器 椀	口径 底径	口:ロクロナデ→貼付テザ→赤褐可鉄, 内:ロクロナデ	やや密	良	灰白2.5Y8/1	底5/12	胎土中、白粒多	019-05
59	142-16	K3c12 SK0010	石製		長さ:12.8cm, 幅:12.4cm, 厚:0.5cm, 重さ:2.52g				完形	ヤスライト、天然砥石類	

第4表　遺物観察表

調査次数	大地区	グリッド	遺構・層名	縁釉破片数	備考
142-9	N13		包	1	
142-12	P12		pit1	1	
142-18	P13		黒色土	1	

第5表　緑釉陶器出土地点破片数一覧表

付篇　史跡現状変更等許可申請

平成15年度中の史跡現状変更等許可申請は、44件提出された。このうち発掘調査を行ったのは、史跡の実態解明のための計画発掘調査が２件、個人や公共事業の現状変更に伴うものが14件である。なお、本書に掲載している第142-１～３次，７次，15次調査の５件は前年度申請分である。

そのほかの23件のうち、次年度の調査とした５件以外は、宅地敷地内における個人住宅の建設など小規模であったり、工事が簡易で地下遺構に影響を及ぼさないものである。なお、基礎掘削工事にあたっては斎宮歴史博物館並びに明和町斎宮跡課職員の立会いを実施している。

15年度の申請の内容は、一覧表（第６表）のとおりであり、これらの申請を（A）個人等から申請されるもの、（B）公共機関等による地域の生活環境整備に伴うもの、（C）史跡環境整備および維持管理等に伴うもの、（D）発掘調査のための申請に分けることができる。

（A）個人等による申請

個人等による申請は、住宅等の新築及び増築に伴うもので33件あった。18件については発掘調査が必要とされ、そのうち15年度に調査されたものは14件である。

他の17件については、個人住宅の建設や除去で土地利用区分の第四種保存地区にあたり、工事立会い等の条件付許可により、史跡に影響を及ぼすことなく施工している。

（B）公共機関等による地域の生活環境整備に伴う申請

この申請は８件の提出があった。その内容は、水道管や下水道管の布設等が２件、電柱等の新設が４件、自治会の消火栓用具格納庫の設置、放課後児童クラブ児童室の建設である。下水道管の布設に伴う調査は次年度で行うこととし、そのほかは工事立会いで着工している。

（C）史跡環境整備および維持管理等に伴う申請

史跡環境整備および維持管理等に伴う申請はなかった。

（D）発掘調査のための申請

この申請は３件あり、２件は三重県教育委員会が主体となり斎宮歴史博物館が実施している計画発掘調査で、1,088㎡が調査された。これらの内容については斎宮歴史博物館から別途調査概報が刊行されている。他の１件は、個人から申請された現状変更の許可判断のために実施する調査の申請である。

（中野敦夫）

	申請地	種別	申請者	変更内容	申請日	許可日	変更面積	区分	備考
1	斎宮字出在家3237-5	A	個人	建物建築	15.4.14	15.6.20	77.27㎡	3	第142-4次調査
2	斎宮字西加座2681-5	A	個人	浄化槽設置	15.4.16	15.5.23	1基	4	第142-13次調査
3	竹川字南裏260、261-2	A	個人	倉庫改築	15.4.16	15.6.6	12.42㎡	4	
4	斎宮字西加座2717-1 2719-1	D	三重県教育委員会	発掘（計画）調査	15.5.19	15.6.20	500㎡	2	第140次計画調査
5	斎宮字楽殿2876	B	中部電力株式会社 松阪営業所	電柱支線の移設	15.5.23	15.6.11	1本	3	
6	斎宮字鈴池4438	A	個人	側溝改修	15.5.28	15.7.24	14m	3	
7	斎宮字北野地内	B	明和町長水戸口眞澄 （上下水道課）	下水道管布設	15.6.10	15.9.18	682.89m	4	第145-6、7次調査
8	斎宮字牛葉3007	A	個人	建物改築	15.6.10	15.7.24	72.26㎡	4	第142-10次調査
9	斎宮字内山3020-11	A	個人	建物除去	15.6.16	15.7.24	3棟	4	
10	斎宮字西加座2681-5	A	個人	建物増築等	15.6.23	15.7.24	3.31㎡	4	
11	竹川字中垣内379ほか5筆	D	三重県教育委員会	発掘（計画）調査	15.7.3	15.7.24	505㎡	2	第141次計画調査
12	斎宮字中西2743 字篠林3139-1	B	明和町長水戸口眞澄 （上下水道課）	水道管布設	15.7.1	15.9.4	50m	4	
13	斎宮字下園2926-8	A	個人	建物増築	15.7.7	15.9.19	23.35㎡	4	第142-8次調査
14	斎宮字中西2754	A	個人	建物建築	15.7.22	15.9.19	65.00㎡	4	第142-6次調査
15	斎宮字西加座2681-5	A	個人	建物増築	15.8.11	15.9.19	14.90㎡	4	
16	斎宮字牛葉118	A	個人	浄化槽設置	15.8.19	15.9.26	1基	4	第142-14次調査
17	斎宮字内山3020-11	A	個人	建物建築	15.9.26	15.11.21	105.17㎡	4	第142-12次調査
18	斎宮字牛葉3007	A	個人	浄化槽設置	15.10.10	15.11.21	1基	4	第142-10次調査
19	斎宮字中西2754	A	個人	建物除去	15.10.23	15.11.28	1棟	4	
20	斎宮字広頭3385-2	B	明和町長水戸口眞澄 （福祉課）	建物建築（放課後児童クラブ児童室）	15.10.24	16.1.9	44.01㎡	4	
21	斎宮字楽殿地内	A	個人	歩道改修	15.10.30	15.11.26	15.60㎡	3	
22	斎宮字楽殿2876	A	個人	建物建築	15.10.30	16.1.16	79.49㎡	3	第145-2次調査
23	斎宮字牛葉3032-1	A	個人	浄化槽設置等	15.11.5	15.12.19	1基	4	第142-9次調査
24	斎宮字楽殿2892-2、-3	A	個人	建物除去等	15.11.10	15.12.19	1棟	4	
25	斎宮字楽殿2892-2、-3	A	個人	建物改築	15.11.10	15.12.19	125.23㎡	4	第142-11次調査
26	斎宮字篠林、楽殿地内	B	斎王自治会長	消火栓用具格納庫の設置	15.12.1	15.12.17	5箇所	3 4	
27	斎宮字出在家3233-41	A	個人	ブロック塀設置	15.12.1	15.12.17	L=17.5m	3	
28	竹川字中垣内455-1、-2	A	個人	建物改築	15.12.8	16.2.20	98.40㎡	3 4	第142-17次調査
29	斎宮字楽殿2892-2	B	中部電力株式会社 松阪営業所	電柱の新設	15.12.16	16.1.7	1本	3	
30	斎宮字中西2342-5、-6	A	個人	敷地造成工事	15.12.18	16.2.3	105㎡	3	
31	竹川字古里575-1	A	個人	駐車場及び庭園	15.11.21		910㎡	3	手続き中
32	斎宮字牛葉3401	A	個人	建物建築等	16.1.6	16.2.20	416.52㎡	4	第145-3次調査
33	斎宮字鈴池4438、4433	B	中部電力株式会社 松阪営業所	電柱の移設	16.1.14	16.2.19	1本	3 4	
34	斎宮字中西611	A	個人	建物建築等	16.1.20	16.2.20	71.21㎡	3	第142-18次調査
35	斎宮字牛葉115	A	個人	浄化槽設置	16.1.21	16.2.20	1基	4	第142-19次調査
36	斎宮字2748-1、-4	A	個人	建物除去等	16.1.22	16.3.26	265.53㎡	4	
37	斎宮字牛葉118	A	個人	水道管布設	16.1.26	16.3.8	L=1.8m	4	
38	斎宮字牛葉3016-1	A	個人	建物改築等	16.1.27	16.2.20	127.11㎡	4	第145-8次調査
39	斎宮字牛葉118	A	個人	建物改築	16.2.12	16.3.8	67.07㎡	4	
40	竹川字東裏277	B	中部電力株式会社 松阪営業所	電柱の新設	16.2.16	16.2.19	2本	4	
41	竹川字古里575-1	D	明和町長水戸口眞澄 （斎宮跡課）	発掘調査	16.2.18	16.3.8	905㎡	3	第142-16次調査 第145-1次調査
42	竹川字東裏270-1	A	個人	個人住宅新築	16.3.18	取下げ	65.75㎡	3	
43	斎宮字楽殿2877-1、-2	A	個人	建物除去	16.3.24	16.5.21	1棟	3	
44	斎宮字牛葉325	A	個人	浄化槽設置	16.3.25	16.5.21	1基	4	第145-4次調査

第6表　平成15年度　現状変更等許可申請一覧表

報告書抄録

ふりがな	しせきさいくうあと　へいせいじゅうごねんどげんじょうへんこうきんきゅうはっくつちょうさほうこくしょ
書名	史跡斎宮跡　平成15年度現状変更緊急発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	三重県多気郡明和町　斎宮跡埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	21
編著者名	小濱　学・中野敦夫・伊藤裕偉
編集機関	斎宮歴史博物館（調査研究グループ）・明和町（斎宮跡課）
所在地	〒515-0332　三重県多気郡明和町馬之上９４５　TEL　0596（52）7126
発行年月日	西暦　２００５年　３月　25日

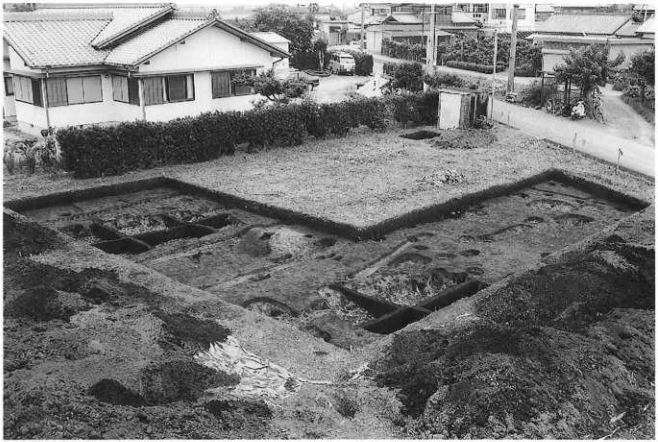
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °　′　″	東経 °　′　″	調査期間	調査面積 （㎡）	調査原因
さいくうあと 斎宮跡	たゃぐんめいわちょう 多気郡明和町 さいくう　たけがわ 斎宮・竹川	24442	210	34°31′55″ ～ 34°32′30″	136°36′16″ ～ 136°37′37″	20030401 ～ 20040331	全19件 合計 1,558㎡	史跡現状変更に伴う緊急発掘調査 （史跡斎宮跡第142次調査）

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
斎宮跡第142次	官衙・集落	奈良　平安 鎌倉　室町以降	掘立柱建物 柱列　土坑 井戸　土壙墓	土師器　須恵器 緑釉陶器　灰釉陶器 鉄製品　焼夷弾	

要約

第142-１次調査では、史跡地内中央南部に位置し、土坑からは斎宮Ⅲ期と考えられる土師器小皿が３枚重なって出土したことを確認した。第142-４次調査では、史跡範囲の北限に位置し、平安時代前半期の底が付く掘立柱建物や人面墨書土器と考えられるものを確認することができた。第142-５次調査では、鎌倉時代の土壙墓や戦争遺物である焼夷弾を確認することができた。第142-７次調査では、三重県内では極めて珍しい初期肥前産陶磁の出土を確認した。第142-８次調査では、方格地割下層区画において、はじめて建物跡を確認することができた。第142-９次調査では、掘立柱建物を構成すると考えられる底部付近に20～30cm程度の丸い石が詰められている柱穴を確認した。第142-16次調査では、「井戸屋敷」のような区域を囲むものであった可能性がある柱列３条、井戸２基、旧地籍図（明治35年段階）の地割方向とも一致する区画溝３条などを確認した。

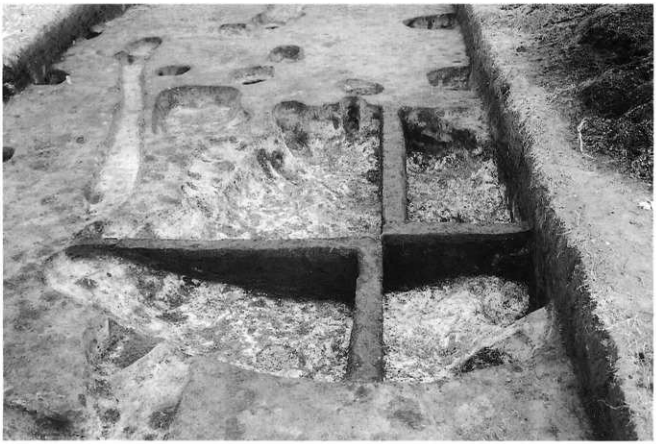
写 真 図 版



第142-４次調査区全景（南東から）

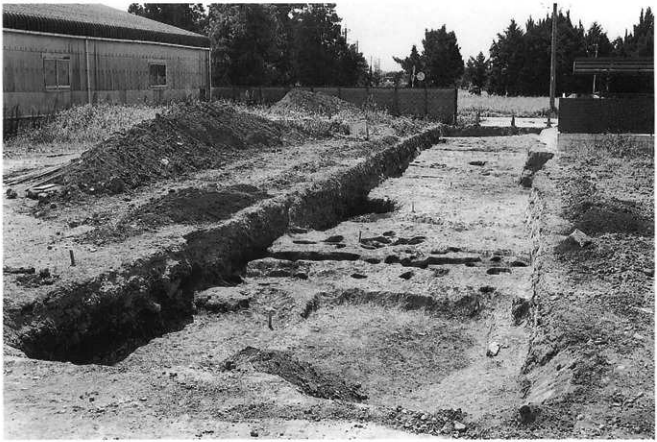
第142-４次調査　ＳＢ8828・8829，ＳＡ8830（北から）

写真図版２



第142-４次調査　ＳＫ8823（南から）

第142-４次調査　ＳＸ8825出土状況（南東から）



第142-５次調査区全景（西から）

第142-５次調査　ＳＸ8950（南から）

第142-５次調査　ＳＤ8954（南から）

第142-６次調査区全景（南東から）

第142-８次調査　ＳＡ8955・8956（東から）

第142-16次調査区全景（西から）

第142-16次調査　ＳＡ8989（北西から）

第142-16次調査　ＳＥ8973（西から）

第142-17次調査区全景

16

13

16

14

28

15

焼夷弾

第142次調査出土遺物

史跡 斎宮跡
平成15年度
現状変更緊急発掘調査報告
平成17(2005)年3月25日
編集 斎宮歴史博物館
明和町
発行 明和町
印刷 光出版印刷株式会社